群教セ	E09 - 02
	平16.218集

自分の思いを主体的に表現しようとする生徒を育てる英語科指導の工夫

― ポートフォリオをいかした評価と支援を通して ―

長期研修員　　太田　昌男
長期研修員　　金井　美規子

《研究の概要》

本研究は、ポートフォリオをいかした評価と支援を通して、自分の思いを主体的に表現しようとする生徒が育つように指導の工夫を行ったものである。具体的には、トピックについて作文を書いて発表する活動において、「ふりかえりシート」のやりとりで作品の変容を追いながら、生徒の課題を把握し、個に応じた支援を与え、自分の思いを伝える楽しさを味わえるように指導の工夫を行った。

【キーワード：英語－中　ポートフォリオ　指導と評価の一体化　個に応じた指導】

Ⅰ　主題設定の理由

現代は情報通信網の発達により、世界の情報が瞬時に手元に届く世の中になった。また、国際交流活動が活発になり、広い視野からの国際理解の深まりが求められている。こうした情報化社会、国際化社会を担う子供たちに求められている英語力は、自分の考えを積極的に相手に伝えることのできる表現の力である。単に文法規則や語彙（ごい）などについての知識があるだけでなく、実際のやりとりを目的として、学習したことを運用できる能力、いわゆる実践的コミュニケーション能力の育成が求められている。

実践的コミュニケーション能力を育成するには、四つの技能を用いた言語活動を効果的に行うことが大切であるが、最近は生徒の「書く力」が低下していると言われている。実際、初歩的な英語を使って話すことができても、文章を書くことに苦手意識を感じている生徒が学年の半数近くもいる。彼らは「書く力を付けたい」と感じているが、英文に直す段階で語彙不足や語順の混同等の困難が伴い、思うように書けないでいる。その原因は、書く活動にあまり楽しさが伴っていないこと、書く時間を十分に取らなかったこと、自分の考えを英語で伝えられた喜びを味わわせる指導の工夫や支援が不足していたことなどが挙げられる。書く力を付けるには、書きたいという気持ちになるトピックや資料を与え、ある程度まとまりのある英文を書く活動を行い、なぜ思うように伝えられないのか、どんなところでつまずいているのかが生徒自身に分かるような指導の工夫をし、達成感を味わわせることが大切である。

そこで、生徒の書く気持ちを高め、つまずきに対して有効な支援をするために、学習過程における評価を指導にいかすことができないかと考え、ポートフォリオに着目した。できあがった作品だけで評価するのではなく、作品ができあがるまでの過程に教師が積極的にかかわり、生徒を励ますような評価をすることにより、「もっと書いてみよう、伝えてみよう」という気持ちが生まれるであろうと考える。また、毎時間の生徒の作品の積み上げをポートフォリオとし、このポートフォリオを通して生徒とともに考え、生徒の努力や作品を認めることにより、言語材料の定着だけでなく、質問しやすい学習環境が作れるといった情意面での効果も期待できると考える。さらに、なぜ生徒が書けなかったのかを分析することにより、教師の授業改善や個に応じた支援につながると考える。したがって、ポートフォリオによって作品の変容を感

じ取ったり、生徒が自ら課題に気付くような支援をしたりすることは、自分の書いた内容が伝わるという実感を味わわせるのに有効であろう。

以上のことから、書くことにおいてポートフォリオをいかした評価を行い、それぞれの課題に応じた支援を行えば、自分の思いを主体的に表現しようとする生徒を育てることができると考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

自分の思いを主体的に表現しようとする生徒を育てるための指導のあり方について、ポートフォリオをいかした評価と支援を工夫することが有効であることを、授業実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　つかむ過程で書く内容について同じ課題をもつグループを作り、ポートフォリオをいかした評価と支援を行えば、伝えたいことを具体化し、明確にして書いて表現しようとするであろう。

2　追究する過程で表現の方法について同じ課題をもつグループを作り、ポートフォリオをいかした評価と支援を行えば、伝えるための表現方法を理解し、適切に書いて表現しようとするであろう。

3　広げる過程で伝え合う活動をするためのグループを作り、ポートフォリオをいかした評価と支援を行えば、自分の思いを伝える楽しさを知り、主体的に表現しようとするであろう。

IV　研究の内容及び方法

1　研究の内容

(1)　自分の思いを主体的に表現しようとする生徒とは

自分の思いを主体的に表現しようとする生徒とは、自分の気持ちや考えなどを学んだ表現を使って進んで伝えようとする生徒である。「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の四つの技能をバランス良く育成することが大切であるが、本研究は「書くこと」に重点を置き、表現することを「自分の思いを明確にする」「自分の思いを適切な英文にする」「自分の思いを伝える楽しさを知る」の三つの段階に分け、それぞれの段階で評価、課題の発見、支援を繰り返しながら、生徒の表現への意欲を育てていく。具体的には、「何を書いたらいいのだろう」「どう書いたらいいのだろう」「どう言ったら相手に伝わるのだろう」という課題について、教師や友達のアドバイスをもとに解決し、相手に分かるような英文で表現しようとすることである。出来上がった自分の原稿を相手に伝えることができてコミュニケーションが成立し、自分の思いを表現することの楽しさを味わうことができると考える。

(2)　ポートフォリオをいかした評価と支援とは

ポートフォリオとは、生徒の作品、自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などを系統的に蓄積していくものである。ポートフォリオ作りの過程で、作品の価値を認めながら積極的なアドバイスを繰り返し与えることは、生徒の学習への意欲を高める方法であると考える。本研究では、ポートフォリオの集積性、対話性に着目した『ふりかえりシート』を作成し、毎時間

生徒が書いた感想や疑問に対し教師がコメントを書き、取組や作品の振り返りができるようにする。教師は生徒の記述から生徒のつまずきを予測し、指導や支援にいかす。また、作品の変容や取り組む態度に注目させ、生徒に「もっといい文で書いてみよう。」という気持ちをもたせ、表現への意欲につなげていく。このように授業中の観察に加え、書いたものの履歴を追いながら評価することで個に応じた支援ができ、生徒の実態に応じた授業を展開できると考える。

(3)『ふりかえりシート』について

『ふりかえりシート』は、「自己評価シート」と「ワークシート」の２種類からなる。

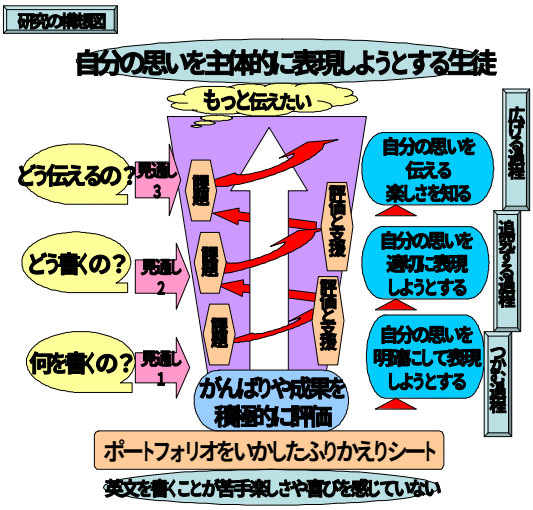
「自己評価シート」は、生徒が授業のめあてを知るとともに、取組について振り返りをするものである。教師はこのシートに記された生徒の疑問に答え、次時へのアドバイスを与える。また、生徒が課題と感じていることに対して、学習のヒントを示したり励ましたりする。

「ワークシート」は、生徒が練習問題で言語材料の理解を深めたり、教師から与えられたアドバイスに従って英文を書いたりするものである。教師がこのシートに記された問題の解答や英文から生徒の理解度を確かめ、つまずきを予測し、支援の方法を考える。

各過程での『ふりかえりシート』を活用する目的及び方法は次の通りである。

つかむ過程では、トピックについて浮んだことをウェビングを使って具体的にイメージし、書きたいことを明確にすることを目的にする。そのため、「ワークシート」に記されたアイデアからどのくらい書きたいことが具体化されているか、英文は生徒の力で書けるものかを教師が評価し、「自己評価シート」の記述から言語材料の定着を確認し、どんな表現を教えれば支援となるかを考えてアドバイスをする。

追究する過程では、書く内容を整理し、文の構成や使用する単語について適切な表現の方法を知ることを目的にする。そのため、英文を作る段階で生じた課題を「ワークシート」から見取り、グループ活動で課題について考えさせ、「自己評価シート」の記述から伝わる文にするためのアドバイスをする。



広げる過程では、「書けた」から「伝えられた」という達成感を味わわせ、表現への意欲を育てることを目的にする。そのため、違うトピックを選んだ生徒同士のグループで作品を相互評価させるとともに、「ワークシート」を比較しながら作品の変容を評価する。生徒は「自己評価シート」で自分の取組を見直し、思いを表現できたか考える。なお、教師は発表がうまくいくように、『ふりかえりシート』を通して、強調したい内容や単語の発音等について表現の仕方を個々に伝える。文章の正しさを求めて添削することよりも、生徒が自分の作品を気持ちを込めて表現できるように励まし、新たな課題発見や次の表現活動への意欲につながる支援をする。

2　研究の方法

(1)　授業実践計画

対象	吉岡町立吉岡中学校２年５組40名	笠懸町立笠懸南中学校２年Ｂ組32名
期間	平成16年10月18日～11月9日（9時間）	平成16年10月1日～10月29日（9時間）
単元名	自分の思いを書いて伝えよう	
授業者	長期研修員　　金井　美規子	長期研修員　　太田　昌男

(2)　抽出生徒

A男	表現することに楽しさを感じられず、書く内容が思い浮かばないことに課題があると感じている。アイデア作りの場面においていろいろな考えにふれさせ、思いを表現できたことに達成感を味わわせたい。	C子	興味旺盛（おうせい）であるが学習に対してや表現することには自信をもてないでいる。自分の考えや気持ちを明らかにし、できたことに賞賛を与え、主体的に表現できるようにしたい。
B子	表現することに興味があり、積極的に発言するが、正しい語順で表現することに課題があると感じている。課題の解決方法が分かるようなアドバイスを与え、より意欲的になるようにしたい。	D子	表現することに興味をもち、日本語で書くことはできるが英語で表現することには苦手意識がある。いろいろな表現の仕方があることを示し、思いを適切な英語で書けるようにしたい。

(3)　検証計画

	検証内容	検証の観点と方法	
		吉岡中学校	笠懸南中学校
見通し1	つかむ過程で、書く内容について同じトピックを選んだ生徒同士でグループを作り、ウェビングを用いて書きたいことをイメージできるような、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、伝えたい自分の思いを具体化し、明確にして書いて表現しようとするのに有効であったか。	自己評価シート①～⑥の記述、ワークシート①～④の記述、グループ活動の観察	自己評価シート①～⑥の記述、ワークシート①～⑥の記述、グループ活動の観察
見通し2	追究する過程で、「使う単語が分からない」「単語の順番が分からない」「良い表現を知りたい」などの課題別グループを作り、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝えるための表現方法を理解し、適切に書いて表現しようとするのに有効であったか。	自己評価シート⑦⑧の記述、ワークシート⑤⑥の記述、グループ活動の観察	自己評価シート⑦⑧の記述、ワークシート⑦⑧の記述、グループ活動の観察
見通し3	広げる過程で、違うトピックを選んだ生徒同士でグループを作り、作品を伝え合うことができるような、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝える楽しさを知り、主体的に表現しようとするのに有効であったか。	自己評価シート①～⑨の記述の推移、ワークシート③～⑥における作品の変容、発表時の観察、発表後の感想	自己評価シート①～⑨の記述の推移、ワークシート⑤～⑧における作品の変容、発表時の観察、発表後の感想

Ⅴ　研究の展開

1　単元名　自分の思いを書いて伝えよう

2　単元の考察

本単元の前半で、吉岡中学校においては感謝祭の由来や過ごし方について内容を理解しながら、不定詞の基本的な用法を習得する。笠懸南中学校においては野外合宿などの体験学習の内容を理解しながら、不定詞の基本的な用法を習得する。“ want to ~ ”や“ like to ~ ”の不定詞の名詞的用法は自分のやりたいことや好きなことなど、自分の気持ちを伝えたり、身の回りの人々を紹介したりする上で役立つ表現である。また、不定詞の副詞的用法は理由を簡潔に説明できるので“ Why ～？ ”を用いた日常会話表現の答えとしても使えるようにしたい。

また、後半で、吉岡中学校においては「夢」「日本の行事」「感謝祭について」の中から、笠懸南中学校においては「夢」「体験活動について」「私のお薦めの校外学習について」の中からトピックを選び、前半で扱った表現を参考にしながら、伝えたいことを書いて膨らませる。アイデアを出す段階からいろいろなつまずきが予想されるが、『ふりかえりシート』を活用することにより、自分の気持ちを表すのに適切な表現について理解を深め、伝えることの楽しさを味わわせたい。書くことに困難を感じている生徒には、支援用のプリントに例文を提示し、自分なりに言い方を変えて表現することで達成感を味わわせたい。

3　目標及び評価規準

(1)　目標

○　相手に伝わるように、既習表現を用いて工夫して書こうとしている。（関心・意欲・態度）

○　英語で書いて伝えるための楽しさを理解している。（関心・意欲・態度）

○　不定詞を使った英文を話したり、書いたりすることができる。（表現）
○　自分の思いが相手に伝わるように、内容や展開を考えて書くことができる。（表現）
○　不定詞を使った英文を読んだり、聞いたりしてその意味を言うことができる。（理解）
○　英文を書くための適切な表現を知っている。（言語や文化についての知識・理解）

(2)　単元の評価規準　（資料編参照）

(3)　指導と評価の計画（資料編参照）

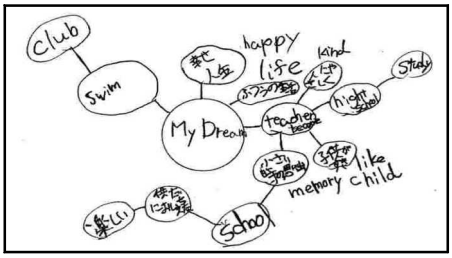
Ⅵ　研究の結果と考察

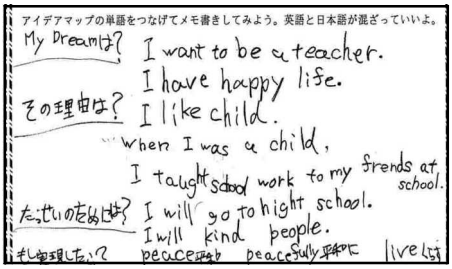
1　書く内容について同じトピックを選んだ生徒同士でグループを作り、ウェビングを用いて書きたいことをイメージできるような、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、伝えたい自分の思いを具体化し、明確にして書いて表現しようとするのに有効であったか

(1)　吉岡中学校の実践から

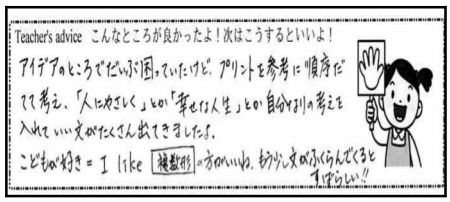
生徒が選択したトピックの内訳は、“ My Dream ”(27人)、“ Japanese Event ”(7人)、“ Thanks-giving Day ”(5人)であった。トピック別に５～７人のグループを編成し、「アイデアマップ」と名付けたウェビングとアイデア作りを２時間で行った。まず教師が例として「看護士になりたい」という“ My Dream ”を書くのに、ウェビング作りをどう行ったらよいかを吹き出しを使って黒板に示した。ウェビングを進めるヒントとして、「夢は何か」「その理由は何か」「夢の実現のために必要なことは何か」「実現したら具体的にどうするか」を生徒に問いながら、分かる部分は英単語で書くよう示した。アイデア作りはウェビングの単語を関連づけて英文のもとにするもので、日本語と英語が混ざった文でもよいこととし、自分の思いをいろいろ書きながら作文の骨組みを作った。疑問点は自己評価シートに書いて教師に聞いたり、グループで話し合ったりした。 A男は“ My Dream ”をトピックに選び、「先生になりたい」という思いを表そうとした。それまでの『ふりかえりシート』の記述から、不定詞の名詞的用法は定着していたので“ want to be ”の使い方は理解できた。しかし、ウェビングに“ teacher、become ”と書いた後アイデアに詰まってしまったので、「なぜそう思ったか」「どうすれば教師になれるのか」について尋ねたところ、小さい時の経験や高校に進学することが大切だということを書きたいと答えた。さらに具体化させるために「教師以外に夢はあるか」「夢が実現したらどうしたいか」について口頭でやりとりし、A男がワークシートに書いたものが資料１である。A男は作文に役立つ表現のプリントから“ when ”を見つけ、使い方を聞いてきたので、文の時制をそろえて使うよう伝えたところ“ When I was a child，I taught school work to my frends at school．”という文が書けた。“ taught ”は未習語だが自分で調べて書いたのでそのことを褒め、資料２のように自己評価シートに夢について自分の考えや思いがもっと書けそうであることを伝えた。

資料1　A男のウェビングとアイデア



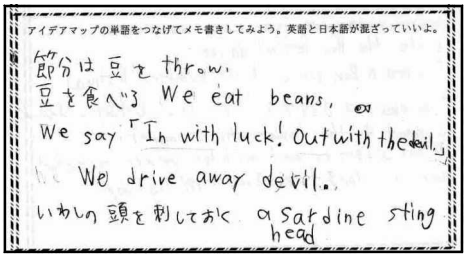


資料2　A男へのアドバイス



B子は“Japanese　Event”をトピックに選び、節分についての思いを表そうとした。ALT に日本の行事を説明するつもりで様子を書くように伝えたところ、「鰯（いわし）を玄関に飾る」「鬼は外、福は内、と言いながら豆をまく」など節分の特徴的なことを表現しようとした。ウェビングでは節分に関する単語がたくさん挙げられたが、アイデアを作る際、自己評価シートに「不定詞が使えない」「豆を投げる時にこう言います、が分からない」と質問を書いてきた。「鰯を飾る理由に不定詞を使ってみよう」とアドバイスし、「～の時」にあたる単語“when”について他の生徒からも質問が多かったので、使い方についてクラス全体に説明した。B子のアイデアは資料３に見られるように、事実を単語に直接置き換えていて文の構成や自分なりの思いを考えずに作っていたので、「節分の様子を思い出しながら自分が経験したことを入れ、まとめる言葉を考えながら書いてみよう。」とヒントを与え、班員のアイデアも参考にするよう伝えた。

資料3　B子のアイデア文

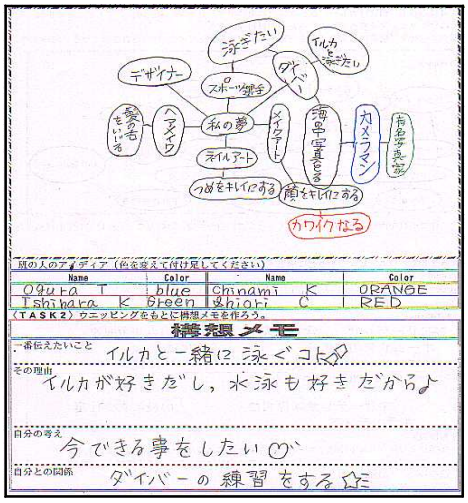


全体として、ウェビングで言葉を関連させて考えさせたことは、いきなり文を作るのとは違い自分のいろいろな思いの中から、本当に書きたいことを精選して、具体的にしていくのに役立った。アイデア作りでは、日本語で書いた自分の文をそのままの順で英語に直そうとする傾向が見られたので、ウェビングの単語を平易な表現に直してからまとまった語句を探し、語句をつないで文を考えるようアドバイスした。例えば、「お年寄りの役に立ちたい」は、「お年寄り」は「年とった人々」、「役に立つ」は「手助けをする」と考え、“want to help old people”となる、などのアドバイスを自己評価シートに書いて伝えた。英文が書けないのではなく、自分が書こうとする文に工夫が足りないことが分かると、グループで違う表現を検討したり、辞書で類義語を調べたりする生徒もでてきた。このような様子から、自分の思いを明確にするのに、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援をすることは、生徒が書きたいことを具体化して表現するのに有効であったと考える。

(2)　笠懸南中学校の実践から

生徒が選択したトピックの内訳は、「夢」(21人)、「体験活動」（１人)、「私のお薦めの校外学習」（８人）であった。トピック別に４人ずつのグループを編成し、学び合い活動を取り入れながらウェビングを用いて自分の思いを具体化した。「体験活動」を選択したのは１人であったが他のグループに入って学習した。１時間目はウェビングから自分の一番伝えたいことや理由、自分の考えなどを明確にして構成メモで文の組み立てを考え、それを基に日本文を作成した。２時間目には作成した日本文を英文に変換した。分からない部分は日本語のままにして、自分の課題を明確にし、追究する過程でのグループ分けの参考にした。

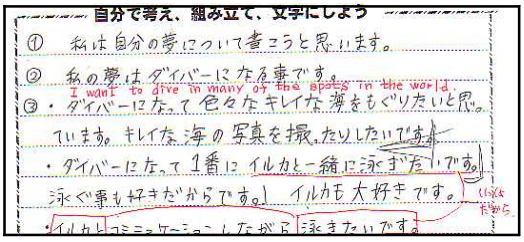
資料4　C子のウェビングと構想メモ



Ｃ子はトピックに「夢」を選んで自分の将来の職業について書こうとした。ウェビングでは水泳が好きなことからダイバーというイメージが浮かんだ（資料４）。しかし、デザイナーや美容などのファッションにも興味がみられ、自分の思いを焦点化できていないようであった。迷っているＣ子に「たくさんイメージを書けたね。」と積極的に出来たことに自信をもたせながら、さ

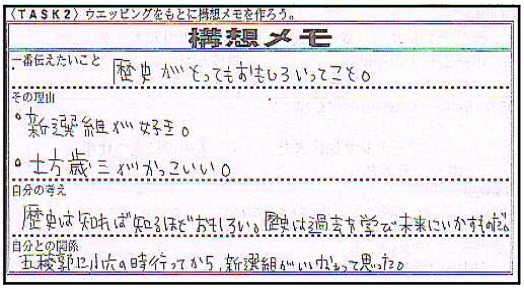
らに「イルカと泳ぎたい」と書いたので「イルカと泳げたら気持ちよさそうだね。」と言葉掛けをし、イメージを膨らませるよう支援した。その結果、構想メモではダイバーになってイルカと泳ぎたいという思いが強くなり独創的な夢が書けそうになってきた。文の組立についても構想メモにあるようにメッセージがしっかり伝わるよう組み立てられ、自分の思いを明確にして表現しようとしたと考えられる。また学び合い活動では、友達がウェビングに「カメラマン」と記入したのでそのアイデアもいかして「きれいな海の写真も撮りたい」という日本文を付け加えた（資料５）。

資料５　C子の日本語（部分）


自分で考え、組み立て、文字にしよう
① 私は自分の夢について書こうと思います。
② 私の夢はダイバーになる事です。
I want to dive in many of the seas in the world.
③・ダイバーになって色々なキレイな海をもぐりたいと思っています。キレイな海の写真を撮りたいです。
・ダイバーになって1番にイルカと一緒に泳ぎたいです。泳ぐ事も好きだからです。イルカも大好きです。
・イルカとコミュニケーションしながら泳ぎたいです。

D子はトピックに「私のお薦めの校外学習」を選んで、新撰組に縁（ゆかり）のある地を回る修学旅行について書こうとした。ウェビングでは新撰組のことを断片的に羅列しただけであまり満足できなかったようだ。そこでなぜ新撰組なのかの理由や、一番伝えたいことを考えるよう助言したところ、構想メモでは「歴史は知れば知るほどおもしろい。歴史は過去を知り、未来にいかすものだ。」と自分の言いたかったことを明確にすることが出来た。D子は本来、日本語で書いて表現することが好きで、とりとめなく書いてしまうところがあるが、構想メモで文の構成を意識でき自分の思いが伝わるような展開を組み立てられた（資料６）。

資料６　D子の構想メモ


〈TASK2〉ウニッピングをもとに構想メモを作ろう。
構想メモ
一番伝えたいこと　歴史がいちばんおもしろいってこと。
その理由
・新撰組が好き。
・土方歳三がかっこいい。
自分の考え
歴史は知れば知るほどおもしろい。歴史は過去を学び未来にいかすもの。
自分との関係
五校郡に小学の時行ってから、新撰組がいいかもって思った。

全体としては、教師の助言や学び合いなどからウェビングでイメージを膨らませることが出来たようだ。イメージを膨らませられない生徒には、まずたくさん書いてみるよう助言した。その中から自分が一番伝えたい事を明確にするために、何が一番伝えたいのか生徒に問いかけながら自分の思いを具体化させ、それを伝えるためにどう文章を組み立てたらよいのか考えるようアドバイスした。生徒のワークシートや感想からも、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、伝えたい自分の思いを具体化し明確にして書いて表現しようとするのに有効であったと思われる。

2　「使う単語が分からない」「単語の順番が分からない」「良い表現を知りたい」などの課題別グループを作り、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝えるための表現方法を理解し、適切に書いて表現しようとするのに有効であったか

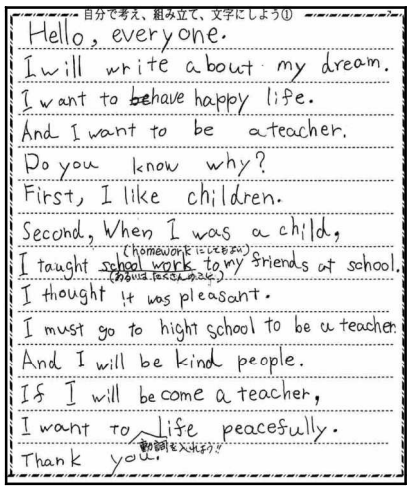
(1)　吉岡中学校の実践から

生徒が選択した課題は、「単語」(11人)「語順」(18人)「表現」(10人)であった。A男は「表現」、B子は「語順」を選択している。グループを課題別に編成し直して、１時間は表現プリントや辞書を使って作文し、もう１時間はグループ内で作品を読み、内容を理解した後に感想を伝え、英文を推敲する活動を行った。

A男は、教師になる理由やそのためにやらなければならないことなどを表現プリントの例文を参考にして、“I must go to high school to be a teacher.”と、不定詞の副詞的用法で説明できるようになった。学習した表現を積極的に使おうとしていることに対し「がんばっている」と声をかけて評価した。さらに、教師になってからの生活についても考え、「もし先生になったら」と表現しようとしたり、前の単元で扱った“think”を使って“I thought it was pleasant.”と表現したりするなど、接続詞の使い方について理解が深まるようになってきた。実際のワー

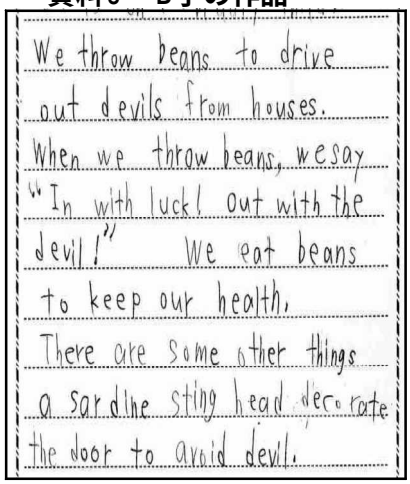
クシートの英文では、“ if ”を使った文が“ If I will become a teacher，I want to life peacefully．”となっていた（資料７）。時制の使い方について気付かせるため、自己評価シートに『“ I think ”の文を過去にするところはよく気付いたね。“ if ”は未来のことが含まれるので“ will ”は必要ありません。“ Very good English ”」と書いて伝えたところ、“ If I am a teacher，I want to make my life peacefully．”と適切な文ができた。グループで読み合った時に、「よくまとめてあって分かりやすい」「文がたくさんあって良かった。分からない単語は意味を言ってあげた方がいいと思う。」と評価されると、『“ when ”を使ったところの意味がどうしたら分かってもらえるか」と相手に伝えるという観点から適切な文を考えるようになってきた。

資料7　A男の作品


Hello, everyone.
I will write about my dream.
I want to ~~be~~have happy life.
And I want to be a teacher.
Do you know why?
First, I like children.
Second, When I was a child,
I taught school work to my friends at school.
I thought it was pleasant.
I must go to hight school to be a teacher
And I will be kind people.
If I will become a teacher,
I want to life peacesully.
Thank you.

B子は、全体へのアドバイスから、“ when ”の使い方も正しく理解し、“ When we throw beans，we say In with luck，out with the devil．”と、豆まきのかけ声を表現することができた。鰯を飾る理由については、“ to avoid devil ”、豆を食べる理由は“ to keep our health ”と不定詞を用いて書き足すことができた（資料８）。そのことをほめるとともに、“ thing ”を用いた文は教科書の本文を参考にするよう伝えたところ、“ There are some other things to do．”という文ができた。グループ内では「内容がおもしろくできていていいと思う」という感想を書いてもらった。また、「日本の行事は健康を祈るものが多い」が“ Japanese Event many pray health．”となっていて、もう少し分かりやすくと指摘されたこともあり、どう表現したらよいか質問してきたので、「誰が、何を祈ったのか」を見落として英語を書いているので、主語について考えるよう伝えると、「人々は」「健康を祈る」「日本の行事において」という順の英文を作ればよいことに気付いた。

資料8　B子の作品


We throw beans to drive out devils from houses.
When we throw beans, we say "In with luck! out with the devil!" We eat beans to keep our health.
There are some other things a sardine sting head decorate the door to avoid devil.

全体としては、選んだ課題にかかわらず、全体に主語のあやふやな日本文をそのまま変換しようとしている傾向があったので、省略された日本語の主語を確認してから書くように伝えた。作品を声に出して読み合う際には、自分の書いた単語が読めなくてカタカナをふったり、原稿のコピーを見ても内容を聞き取ることが難しい生徒もいたが、練習後にグループで分からないところを確認することによって、一つの日本語でも多様な表現ができることを理解し、適切な英語を用いて表現するようになった。難しい単語を用いるのがよいのではなく、あくまでも自分の言いたいことが分かる表現で書くことが大切だと理解したようだ。生徒の記述「自己評価シートに質問したいことが気軽に書けてやりやすかった」「グループで自分の分からない表現を教えてもらった」などから、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝えるための表現方法を理解し、適切に書いて表現しようとするのに有効であったと思われる。

(2)　笠懸南中学校の実践から

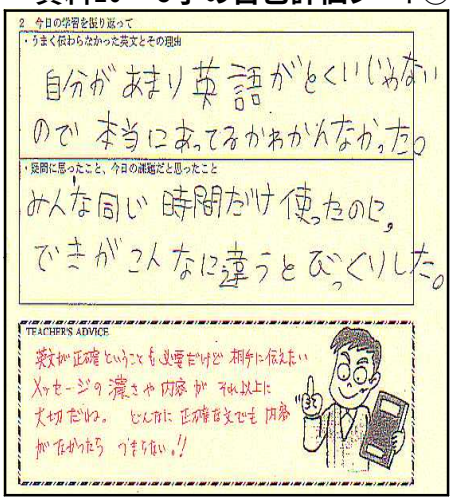
生徒が選択した課題は、「単語」(21人)「語順」(４人)「よりよい表現」(５人)であった。C子は「単語」、D子は「語順」について課題を選択している。１時間は生徒からの質問や『ふ

りかえりシート』の作品から生徒の課題をつかみ、グループごとに支援プリントを配布したり、個に応じて助言したりした。もう１時間は班の中で原稿のコピーを回し、自分の思いをより適切にするために学び合いを通して推敲し合い、課題を解決していった（資料９）。

資料9 グループで学び合う生徒

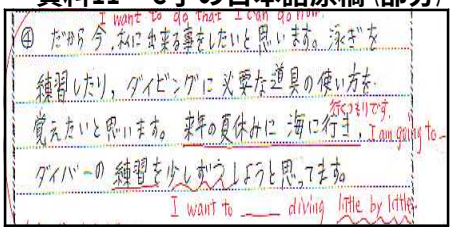
Ｃ子については評価シート⑧の記述から、自分の作成した英文が正確かどうか不安な様子が読みとれたので、「正確さも大切であるが、メッセージが伝わっているので大丈夫」と伝えた（資料10）。「来年の夏休みに海に行き、ダイバーの練習を少しずつしようと思っている。」の「行き」を「私は行くつもりだ“I'm going to go ～”」「ダイビングの練習を少しずつやりたい“I want to（　　）diving little by little.”」とワークシートに記入し、（　　）の部分は空欄にして自分で調べさせた(資料11)。

資料10　Ｃ子の自己評価シート⑧

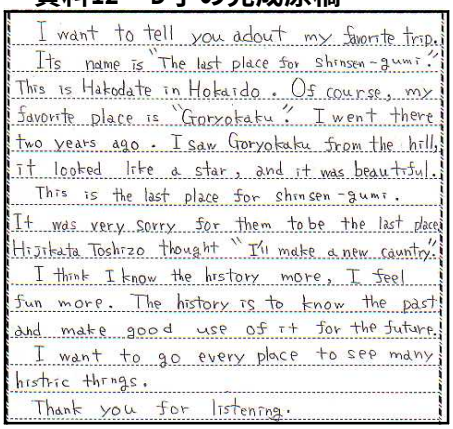


Ｄ子は、日本文を英文にする時に、英語で表現しづらい日本語が並んでしまい、辞書で調べ、語法などを考えないまま書いている部分が多かった。既習の表現で置き換えられるもの、表現できないので削除した方が良いものをアドバイスした。例えば、日本文に「新撰組以外にも歴史的建造物を見る旅がしてみたいです。」と自分の思いを表現したが「たくさんの歴史的建造物を見るために旅に行きたい。」と言い換えることで不定詞が使えることを助言し“I want to go（to）every place to see many historic things.”と出来上がった。また「近くの高台から見た五稜郭は星の形がとても美しかった。」と表現したいが関係代名詞や後置修飾は未習なので「私は丘の上から五稜郭を見た。それは星に似ていた。とても美しかった。」と分かりやすい表現に置き換えるよう助言した。その結果“I saw Goryokaku from the hill, it looked like a star, and it was beautiful.”と表現できた。「土方歳三は蝦夷地（今の北海道)で新しい国を作ろうと思っていた。」を“Hijikata Tishizo think Ezo-chi(now is Hokkaido)new Japan”と表現したが“I'll make a new country.”と“Hijikata thought”を組み合わせれば表現できると助言した。その結果自分の思いを適切に表現できるようになっていった(資料12)。

資料11　Ｃ子の日本語原稿（部分）



資料12　Ｄ子の完成原稿



全体としては、難しい日本文を作成して、そのまま英文にしようとする生徒が多く見られた。そこで、生徒の自己評価シートの「うまく英語に直せなかった文」という欄に、既習の言い方への書き換えなどをアドバイスした。また、主語、動詞、目的語、副詞句の扱いなどの文法的に間違っている表現についても説明を行った。特に主語をどう考えるかが日本語と英語では違いがあるので考えさせた。より良い表現を知りたい生

徒へは、長過ぎてどう表現したら良いかわからない場合には、文を区切ったり二つの文にしたりするよう助言したり、文の接続の仕方を提示したり、相手に分かるようにするには既習の表現で表すことが大切だと助言した。このように『ふりかえりシート』から得られた情報を教師用のポートフォリオとして収集し（資料13)、次時の指導にもいかした。このような授業中の言葉掛けや自己評価シートへの教師のコメントが「次の授業に役に立った」と感じている生徒が授業後の感想にも多く見られた。したがって、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、伝えるための表現方法を理解し、適切に書いて表現しようとするのに有効であったと思われる。

資料13　教師用ポートフォリオの一部

氏名	課題発見	課題解決	英文作成	振り返り	行った支援
A	2	2	3	2	7文、語順でつまずく。既習の表現で何とか言える
B	2	2	3	2	8文、完成に近いので段落の変え方など指導した。教科書の表現をうまく取り入れた
C	3	2	1	2	3文、1～2文言える文への言い換えが必要、個別指導後積極的になった
D	3	2	2	3	5文、日本語が難しく、既習の英文で表現しずらい。不定詞の副詞用法うまくつかっている。

注:数字は自己評価　3＝A、2＝B、1＝Cを表す

3　違うトピックを選んだ生徒同士でグループを作り、書いたものについて伝え合うことができるようなポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝える楽しさを知り、 主体的に表現しようとするのに有効であったか

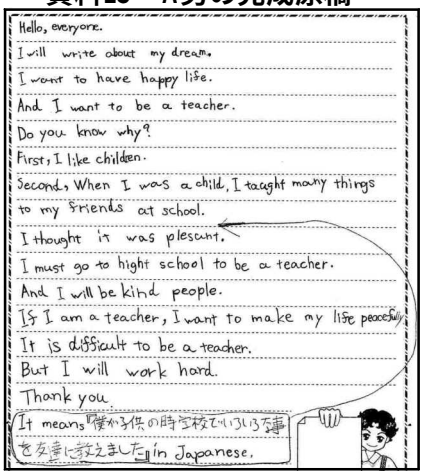
(1)　吉岡中学校の実践から

選んだトピックが異なる生徒で構成される９つのグループを編成し、作品の発表を行った。前時の推敲の場面で練習していたので、読むスピードや声の大きさなどに気を付けて、発表と感想を書く活動がスムーズにできた。はじめに数回練習を行ったあと、各グループで順番に作品を発表し、質問や感想を交換し、教師は机間指導で様子を観察した（資料14)。

資料14　発表の様子

A男は未習語“ when ”を使った文の説明に苦慮していたが、授業のはじめに分かりづらい表現は“ it　means ～ ”を用いて説明するよう全体に伝えたところ、“ Second，when I was a child，I taught many things to my friend at school．It means「僕が子供の時、学校でいろいろな事を友達に教えました」in Japanese．”と補足して、グループの友達に理解してもらうことができた。また理由を“ First，Second ”を使って順序立てて説明するなど分かりやすく工夫し発表も大きな声でできたので、班員から「なりたい夢がよく分かった。すごく良くまとめられていた。」という感想を自己評価シートに書いてもらった。教師の目からも、これから勉強をがんばって夢を達成しようとする気持ちの表れた作品になっていることが見取れ（資料15)、A男自身の感想にも、「文を書くことが好きになれた」と意欲的な様子が書かれていた。彼は『ふりかえりシート』についても「あとで見たときに何をやって、どれくらいできたか分かって良かった」と自分なりに作品ができていく過程が分かり励みになったことを感じていたようだ。自己評価シートには、良い文が書けたことと積極的に書こうとしていたことに自信をもつようコメントして返した。

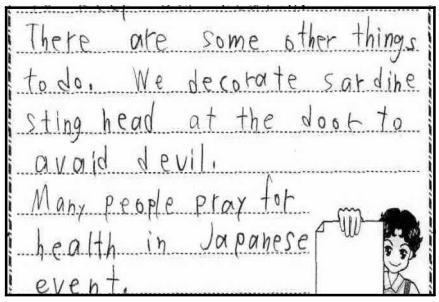
資料15　A男の完成原稿



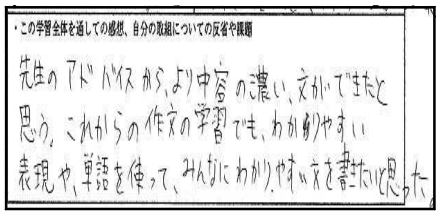
B子は前時に課題になっていた文も“ Many people pray for health in Japanese event．”と完成

できた（資料16）。練習の様子でやや発表の声が小さかったので気を付けるように伝えた。発表後、「日本の行事についてよく分かった。だいたい聞き取れた。」「もう少しゆっくり話すと分かりやすい。いいことが書いてあるのにもったいない。」という感想を班員から自己評価シートに書いてもらった。落ち着いて単語の発音も良かったが、もう少し相手を見ながら大きな声で発表できると説得力のある発表になった。しかし、内容において未習語や不定詞を積極的に使おうという思いの表れた良い作品であり、不定詞の形容詞的用法が使えたことは評価できる。彼女の自己評価シートに「不定詞を三種類使って、節分のことが分かる良い文が書けました。今度は読みで表現力を付けよう。」と良かった点と次の課題について伝えた。B子自身は資料17のような感想を残し、今度は自分の学校生活のことや将来の夢について書いてみたいとも記述していた。

資料 16　B子の完成原稿（抜粋）


There are some other things to do. We decorate sardine sting head at the door to avoid devil.
Many people pray for health in Japanese event.

資料17　B子の感想


・この学習全体を通しての感想、自分の取組についての反省や課題
先生のアドバイスから、より中容の濃い、文かいできたと思う。これからの作文の学習でも、わかりやすい表現や、単語を使って、みんなにわかりやすい文を書きたいと思った。

全体としては、アンケート「自分の書いた文が相手に伝わるのは楽しいか」に対し、「楽しい」(49%)、「まあまあ楽しい」(32%)、「あまり楽しくない」(11%)という回答であった。「楽しくない」と答えた生徒は、読むのが難しいと音声面での課題を感じている生徒が多かった。他に記述された回答を見ると「こんなに長い文書いたことがなかったけど、言いたいことをつなげていったらだんだんつながってきて発表できるようになった。」「もっとたくさんの表現を覚えて言えるようになりたい」「ちゃんと聞いて分かってくれる人がいると、とてもやりがいがあるなと思った」など、もっと伝えたいという気持ちや表現できたことの達成感、練習の回数を重ねるごとの変容を生徒自身が感じ取ることができたという感想が多かった。『ふりかえりシート』についても、肯定的な意見が多かった。教師にとっても、『ふりかえりシート』に書かれた疑問を通して、生徒が難しいと感じている点や授業で十分理解されなかった点について振り返ることができ、生徒の視点に立った授業作りに役立った。

以上のことから、ポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝える楽しさを知り、主体的に表現しようとする生徒を育成するのに有効であったと思われる。

(2)　笠懸南中学校の実践から

ここでは新たな情報交換ができるように、また、なるべくトピックが重ならないように配慮した５班のグループ編成を行った。グループ内でそれぞれの作品を発表し、感想を付箋（ふせん）に書いてお互いに交換した。その付箋を自己評価シートに貼り、それらを見ながら振り返りを行った。

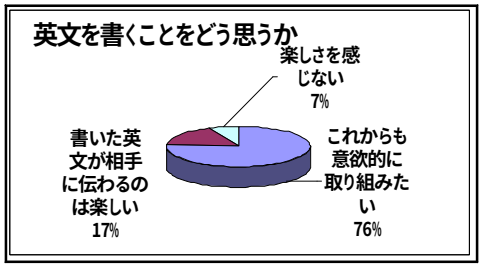
C子は、グループ内での発表では、恥ずかしそうにしながらも笑顔で発表した。「自分ではとても緊張して自分がどこを読んでいるのか分からなくなった。でも良く聞き取れるようがんばった。」と感想を述べている。友達からは、「C子の発表を聞いてイルカと泳ぎたくなりました。」「私も海が好きなのでこんな仕事もいいと思う。」などの感想が得られた。毎回出来たことを認めるよう言葉掛けをすることにより、表現することのおもしろさにだんだん気付いて、前向きに表現しようとするようになってきたのが観察できた。授業後の感想では「書く楽しさを知ったし、自分の言いたいことが言えるのも楽しい。今後も外国人にも伝わるような英文を自分の力で作ったり、話したりできるようになりたい。」と記述している。

D子は発表練習を何度も行い、自信をもって発表していた。友達から「とても聞きやすかっ

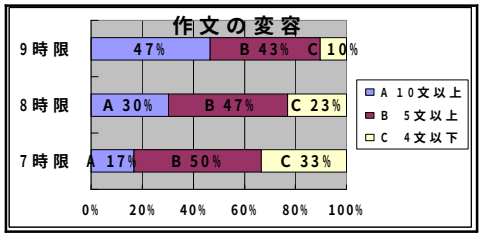
たし、詳しい説明をしていて良かった。」との感想が得られた。「そんなに難しいことは言ったつもりはないのに、少し難しい単語を使い過ぎたみたい。せっかく良いことを書いても、内容を分かってもらえないと意味がない。もっと伝わるようにしたい。」と感想を述べている。さらに自己評価シートに、今後「書くこと」をもっと意欲的に学習したいとの記述があった。

全体としては、作品の発表前には自分の英文が伝わるか不安な様子であったが前向きな評価を与え、相手に伝えることを前提に読む練習をし、発表を聴く側も前向きに感想を書くことによって、自信をもって発表できた生徒が多かった。相互評価も一生懸命良いところを探して書いている生徒がほとんどであった。授業前は「英文を書くことが好き」と答えたのが26%であったが、授業後のアンケート（資料18）では「これからも意欲的に取り組みたい」「書いた英文が相手に伝わるのは楽しい」併せて93%であった。授業後の感想から「文の作りや、意味を分かるようにして多くの英文が書けるようにしたい。」「もっと長い英文を作ってみたい。」「表現をどんどん覚えて文を作るときにすぐに使えるようにしたい。」など「書くこと」を中心に広く表現活動に意欲的に取り組みたいと感じている生徒が多かった。評価シートでは、書けた英文の量の目安として10文以上をＡ、５～９文をＢ、４文以下をＣとしたが、最終的には90%の生徒がＢ以上の評価となった（資料19）。このことから次第に書く意欲が増したことが分かる。

資料18　アンケートの結果



資料19　作文の量の変容



以上のことからポートフォリオをいかした『ふりかえりシート』を用いての評価と支援を行うことは、自分の思いを伝える楽しさを知り、主体的に表現しようとするのに有効であったと思われる。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

『ふりかえりシート』を用いて、ポートフォリオをいかした評価と支援を行うことは、授業における個々の生徒への支援の有効性を高め、自分の思いを主体的に表現させるのに効果があったと考えられる。具体的には、毎時間生徒に質問や感想を書かせることで、「みんなの前では聞けないが、シートになら疑問が書ける」「アドバイスを頼りにやってみよう」という安心感をもたせることができ、こうした情意的な効果が「がんばれば書ける」「こんなことも表現してみたい」という気持ちにつながった。また、課題別グループでの学習は、伝える相手を意識しながら英文を書いたり話したりでき、進んで表現活動に取り組む姿勢が身に付いてきた。

課題としては、生徒が自分自身の取組を振り返り、自己評価力を身に付けるには、十分な時間が取れなかったことが挙げられる。もう少し時間をかけて、生徒の実態に合ったシートの工夫や改善ができれば、生徒がもっと質的な面から変容を自覚でき、自ら課題に気付くような指導ができたのではないかと考える。

〈主な参考文献〉

・西岡　加名恵　著　『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』　図書文化（2003）
・北尾　倫彦・長瀬　荘一　編集　『中学校英語観点別評価実践事例集』　図書文化（2003）
・三浦　孝・中嶋　洋一・弘山　貞夫　編著　『だから英語は教育なんだ』　研究社（2002）